

マンガ家

里中満智子さん

MACHIKO SATONAKA

【さとなか・まちこ】1948年、大阪府出身。高校在学中に『ピアの肖像』で第1回講談社新人マンガ賞を受賞しデビュー。『アリエスの乙女たち』『狩人の星座』など500作品以上を創作。『古事記』『心中天網島』『天上の虹』など歴史物も多い。全作品と文化活動に対し、2006年に文部科学大臣賞受賞、2010年に文化庁長官表彰受賞。2023年には文化功労者にも選出されている。日本漫画家協会理事長、大阪芸術大学キャラクター造形学科の教授を務める他、一般社団法人マンガジャパンの代表理事として日本のマンガ文化発展と国際交流にも力をそいでいる。

生きることがどういうことか
それを知るために生きてゆく
人生の中のた
そのくりか

考えるヒロインに
思いを込めて

意志の
迷うのかわ

力のすべてを一人の女との

たがってばかりじゃ
なれないわよ

もつと愛されたいもつと強くなりた
い
そのために苦しい思いはするけど

INTRODUCTION

マンガ家・里中満智子さんの代表作の一つ『天上の虹』。飛鳥時代を生きた持統天皇をヒロインに、その波乱に満ちた生涯が、当時の社会情勢や複雑な人間ドラマをからめながら、緻密な歴史考証をもとに描かれている。困難や苦しみに直面しても、国の未来を見据え毅然と立ち向かうヒロインの姿には、現代を生きる私たちへの示唆がある。数々の名作を世に送り出してきた里中さんに、作品に込めた思い、マンガ文化への思いを含め話をうかがった。



Manga artist
MACHIKO SATONAKA

——16歳でマンガ家としてデビュー以来、長年にわたり第一線で活躍されている里中さんですが、子どもの頃からたくさん本を読まれていたそうですね。

外で遊ぶのが好きじゃなくて、本さえあれば嬉しいという子どもでした。絵本にしても活字にしてもマンガにしても、そこに物語さえあればよくて、いろんな人のいろんな運命に興味を引かれました。中学生になるとノンフィクションや歴史本にも手を伸ばすようになり、読むではワクワクしていましたね。

——『万葉集』も中学生の時から読まれていたとのことですが、どこに惹かれたのですか。

小学生の頃から百人一首を通して歌には親しんでいましたので、中学2年生で初恋をした時、この気持ちにぴったりのような歌はないかと探したんですね。図書館で『万葉集』を見つけて読んでみたら、びっくり。男性ってこんなに女々しいのかと。

周りの大人たちの話や時代劇に出てくる武士のイメージから「昔の日本男児はみんな

強くて、弱音など見せなかった」と刷り込まれていたけれど、『万葉集』には男性がメソメソ泣いて、彼女の心を得られないなら死んだほうがましだなんて言っている歌があるわけです。それも、やんごとない身分の男性が、身分の低い女性に送った歌だったりするから、益々、驚きました。

——イメージと180度違うじゃないの!!と思われたんですね。

それに4500首以上も歌があると、たいていその時の気持ちにピタッとくる歌が見つかります。どれほど時代が変わっても、人の気持ちというものはそれほど変わらないのだと感じられて、おもしろかったですね。そこから、この歌を詠んだ人はどういう人だったのだろうと興味がわいてきました。誰もが知る歴史上の人物について書かれて

いることも、実際にそうだったのだろうかとか疑問を持ったり、あれこれ気になり始めたのが、その頃でした。

——マンガ家になることを初めて意識されたのは、いつだったのですか。

小学校高学年の時です。当時、教育関係者や保護者たちによって、子どもの教育に良くない本を「悪書」として追放する運動が巻き起こっていました。マンガも、文字より絵が多くて何も考えずに読めるから脳の成長期にはふさわしくないという理由で、やり玉に挙げられました。手塚治虫先生の『鉄腕アトム』でさえ「ロボットが喜怒哀楽の感情を抱くなんて非科学的過ぎる。子どもが間違った科学を信じたら困る」と言っている子どもたちの手から取り上げられたのです。

——えっ!? 今では考えられません。

いろんな人の
いろんな運命に興味を引かれました



私は『鉄腕アトム』に限らず手塚作品が大好きでしたし、悪書扱いされている「マンガ」を守りたいと思ったけれども、まだ子どもでしたから、そのための選択肢が少なかった。それでマンガ家を目指すしかなかった。それに物語を考えるのも好きでしたし、文章で書くよりもマンガという形式のほうが、自分にとって楽しかったというのもありましたね。

——絵は得意だったのですか。

物心ついた頃から得意で、学校を通じて地域のコンクールに出すといいて入選していました。小学生の頃はお友だちに頼まれてよく絵を描いていましたが、女の子は

ドレスを着たお姫様、男の子は恐竜を描いてほしいという注文が多くて。いつも同じ絵じゃつまらないから、自宅で図鑑の恐竜を記憶してきて、どうすればカッコよくなるだろうかと考えながら描いていました。

でも、画家になろうと思ったことは一度もないんですよ。絵だけを描いているよりも、物語を画面で表現するほうが一人で映画を作っているような感覚でワクワクしましたね。

——確かに、映画は脚本家、俳優、カメラマンと多くの人が関わって一つの作品をつくり上げるのに対し、マンガならそのすべてを一人でできますね。そこからマンガ家を

目指されたのですか。

中学3年になってすぐ、個別の進路指導がありました。どの高校を受験するか決めるだけでよかったのですが、私はまず将来どんな職業に就きたいか決めなければ進路は選べないと思って、自分は何になりたいのだろうと真剣に考えました。

それでやはりマンガ家になろうと覚悟を決めるのですが、尊敬する手塚先生の作品を読んで、森羅万象あらゆることを知らなければマンガは描けないと思い込んでいました。マンガ家になるためには膨大な知識が必要だと思い、受験勉強そっちのけで百科事典を読んでは頭に叩き込んでいましたね。

——マンガ家になるという目標に対し、周囲の反応は？

否定的な意見をしてくる先生ばかりという中、たった一人、女性の先生が「里中さん、あなたマンガ家になりたいんだって？ 私はマンガのことを何も知らないからアドバイスはできないけれど、夢が叶うといいわね」とおっしゃったんです。その言葉を聞いて、私はすごくホッとしました。「大人だって、知らないことは知らないと言っていんだ。大人は子どもにすべてを指導しなければと思っているけれど、そこで間違ってしまう。知らないことを知らないと言える大人になれたら、どれだけ気持ちよく生きていけるだろう」と思ったのです。

——その後、マンガ雑誌の公募で入賞して、高校1年生でデビューされています。プロ

世界のどこかで誰かの力になれば、 と思いながら作品を描いています

のマンガ家になってみて、いかがでしたか。

18歳で上京したのですが、編集者から「期待したほど良い作品が出てこない。大阪に帰れ」と言われたこともありました。その時は「今に、この人が描いてくれたって言うような作品を描いてやる!」と悔しさをエネルギーに変えて頑張るしかなかったです。

——随分、厳しいことを言われたんですね。

読者があつてこそその仕事ですから、編集者も必死です。ただ、編集者がよかれと思つてアドバイスしてくれることでも、自身が納得できなければ、「わかりました」と口で言いながら、内心では「その通りにするもんか」と思っていました。だったらどうするかは、自分で考えなければならぬですけれどね。出版社も道楽で本を出しているわけじゃないですし、商業雑誌である以上、私も読者に支持されて売上げに結びつけないければ、とは意識していました。

ですが、読者に支持されたいと願うあまり、自分が描きたいものより、読者にウケるものを意識し過ぎてはいけません。自分を見失つてはいけなく、ということには常に気を付けていました。

——自分を見失つてはいけません、ですか。

マンガ家として長く続けるコツは何ですかという質問をよく受けますが、一番大事なことは「自分はこれが描きたいんだ」という、自分が納得する理由です。そこから氣力が湧いてきますし、作品の魅力にもなってくるのだと思います。これならウケるだろうとい

う気持ちでは、ほとんどの作品しかできませんし、そういう作品はたいがいウケません。

——里中さんは500以上の作品を描かれています。マンガ家としての地位を確立できたと思える作品はあるのですか。

そんなものはないです。読者にとつては、作品がおもしろいかどうかすべてで、ベテランも新人も関係ありません。そういう意味で、マンガ家の世界はすごく公平です。

——歴史を扱った作品も多く描かれますが、調べるのが多くて大変なのでは?

もともと歴史の本を読むのが好きで、「この人物はどういう人だったのだろうか?」からスタートして、「本当はどうだったのだろうか?」「なぜこうなったのだろうか?」と思いを巡らせるうちに描きたくなるんです。ある程度知識を持つていて、それがヒントとなつて描き始めることがほとんどです。

もちろん実際に描くとなれば、建物や服装、生活用品など細かいところまで絵にしなければなりませんので、すべて調べ直します。ですから、描く予定がなくても、旅先などで資料を見つけたら必ず購入しますね。いつか描くかもしれないと思つて。

——作品を通して、読者にどのようなメッセージを伝えたいのですか。

昔の少女マンガは泣くヒロインがよく登場していました。私はそれが嫌でした。喜怒哀楽の感情面は描かれていても、何をどう考えたかについてはほとんど描かれていない。でも、人は考えをもとに行動しま

すよね。その考える部分が描かれていなければ、単に感情に振り回されているだけになってしまいます。だから、私は考えるヒロインを描きたかった。

恋愛ものでも「王子さまが迎えに来る! 幸せ」という前提に納得できませんでした。出会った相手とどのように生きていきたいかが大事であつて、一生に関わる問題です。そのことを伝えるため、私は教鞭を執つている大学で、若い学生たちに「シンデレラ夫婦の結婚後を想像して、物語を考える」という課題を出したりしています。

——結婚をゴールではなくスタートとして、物語をつくる課題とは、おもしろそう!

ただ、考えるヒロインを描こうとすると、どうしても理屈っぽくなるんです。若い頃は編集者に「こういうシーンは、鬱陶しいからいらぬ」とよく言われましたけど、それでもヒロインが考えるシーンは絶対に外してはいけなくと思つて意図的に描いていました。

——「自分が描きたいものを死守された」と。

そうするうちに、読者が支持してくれるようになり、「あの作品のセリフに救われた」とかいろんな反応が返ってきて嬉しかったですね。私はいつも、世界のどこかで誰かの力になれば、と思いながら作品を描いています。どの仕事もそうですが、真摯な姿勢で向き合うことと、どこかで誰かの役に立っていると思像しながら働くことが大事なのではないかと思っています。

日本の過去のマンガ作品を アーカイブ化することが、長年の夢です



——ところで、いまやマンガは日本を代表する文化となり、世界中にファンを持つほどですが、その要因は何だとお考えですか。

あるアメリカ人のマンガ家と知り合った際、「私は○○という作品で、○年～○年まで○○というキャラクターを描きました」と自己紹介をされて知ったのですが、アメリカンコミックは分業制なんですね。マンガ家が描いた作品の著作権を出版社が買い取って、脚本、キャラクター、描き文字と分業するので、マンガ家が代替わりしても安定した作品がつくれます。それに対して、日本のマンガのつくり方は独特で、扱うテーマもジャンルも、世界から見れば非常識なままやってきたわけです。

——非常識とは？

世界では、マンガは子どもが読むものだから、ある程度は教育的でなければならぬと

いう常識がありました。ですが、日本では、手塚先生を筆頭に「マンガで不条理が描けないか？」「滅んでいく正義が描けないか？」「誰にも理解されない、いびつな心を持った主人公を描けないか？」といろんなチャレンジをして、ありとあらゆるテーマやジャンルの作品がつけられてきました。それを読者もしっかり読み取って、育ててくれました。

世界の常識とは違っていても、読者がついてきてくれるなら広げていこう。子どもには無理でも大人だったら理解してくれるだろうなどと、マンガ家たちがいろんな作品を描いていった。その自由さが大事で、だからこそ日本のマンガには多種多様な個性があって、唯一無二の作品が充実しているのです。マンガ家の信念と作品が結びついて説得力のある世界が生まれ、それが海外での読者獲得にもつながってきたのだと思います。

——なるほど。自由に表現できる場と作品を理解してくれる読者という土壌が、日本のマンガ文化を育んできた。

いま、世界の若者たちの中には、日本式のマンガを描きたいとチャレンジする人が増えていきます。日本でデビューして売れたら、世界基準になれると思っている。野球で言えばメジャーリーグのような存在が、日本のマンガです。

——正に憧れの存在なのですね。それでは、最後に今後やりたいことを教えてください。

日本の過去のマンガ作品を、後世の人々に読んでもらえるようアーカイブ化すること

が、長年の夢です。1冊しか残さなかったマンガ家の作品や名前を忘れられてしまった作品も含め、すべてが日本のマンガの歴史です。それらが刺激となり、私はマンガ家に育てていただきました。名作だけじゃなく、いろんなマンガ家のいろんな作品があったからこそ、日本のマンガは多様で興行きのある文化として発展してきました。

——今は制作段階からデジタルデータ化されている作品も多いでしょうが、昔の作品は紙にインクで描かれていますよね。

昔は紙にしてもインクにしても、今とは比べ物にならないほど品質が低く、経年劣化も激しいです。特に1980年以前の作品は、紙がボロボロになって、裏写りがひどくなってきたいて、後世の人に読んでもらうことができないのではないかと危惧しています。そうなる前に、すべての原稿をデータ化しておきたいのです。

それに、マンガ家がお亡くなりになると、ご遺族との関係によっては、作品が大切に扱われず、捨てられる可能性もあります。1つしか残っていない作品を失ってしまう、二度と手に入れることはできません。手遅れにならないうちに、できる限りすべての作品を良い状態で残して、100年後、200年後の人たちにも読んでもらえるようにする。それが今の私の悲願です。

——ぜひ実現されることを願っています。

お話しいただき、ありがとうございました。

(インタビュアー／ライター 更田沙良)